Kwansei Gakuin University

# 日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育[1)]

陣　内　正　敬

## 1．はじめに

カタカナ語やカタカナ文字の教育（以下、両者を含めて述べる場合には「カタカナ教育」）の方法についての議論は、日本語教育一般と同様に、教師側、学習者側、それに教材の３つの方向からすることができる。これまでのカタカナ教育の研究は、モトワニ（1991a）のカタカナ語使用の問題指摘、モトワニ（1991b）の辞典作成、岡本（1997）、李政祐（1999）、Uchida and Nakamura（2000）、李美禮（2002）、木本（2003）など、学習者側の視点に立ったカタカナ語習得や使用上の具体的な方策を論じるものが多い。

一方、教師側からのカタカナ教育研究として国立国語研究所（1990）などがあるが、質、量ともに、まだ十分な議論がなされているとは言えない。これは、カタカナ教育の議論がまだ初期の段階だということを物語っている。また、教材に関しても十分ではなく、カタカナ教育は手探りの状況が続いていると言える。

本論では、そのうち学習者を中心に据えて、これまであまり議論されて来なかった、彼らのカタカナ語に対する意識を探ることにより、彼らが感じている困難点や抱いているニーズなどを明らかにして、そこから見えてくるカタカナ教育の考え方を論じたいと思う。

なお、以下の議論は、中山編（2006）を資料としている。調査に協力していただいた関係機関、日本語教師、日本語学習者の方々に感謝申し上げる。

## 2．調査の目的と概要

### 2.1　調査の目的

調査は日本語教育の現場においてカタカナ教育がどのように行われているのかについての実態を把握することを目的に実施された。現代日本語の現状を見た場合、日本語教育の現場においては、その教育素材としてのカタカナ語は避けて通れない事態に至っているという現状認識と、これからのカタカナ語教育のあり方を探るためである。

1）本稿での表記は、カタカナとし、片仮名とはしない。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



## 2.2 調査の概要

調査は2005年８月から10月、日本語教育機関の地域的バランスを考慮して抽出した全国の日本語教育機関198機関に宛てて、日本語教育「機関用」調査票１部、日本語「教師用」調査票５部、日本語「学習者用」調査票10部ずつを郵送した。回収率は、機関用が29.3%（58部）、教師用が21.3%（211部）、学習者用が24.2%（479部）であった。

本稿は、このうちの学習者用の調査結果をもとに考察を進める。調査票は大きく、国籍、母語、性別、年齢、所属、在日年数、日本語学習期間、英語学習期間などを尋ねたフェースシート部分（Q１～Q10）と、カタカナ文字に関する質問（Q11～Q15）、カタカナ語に関する質問（Q16～Q24）の３つの部分に分かれている。このうち、カタカナ文字とカタカナ語に関する部分について、質問文のみを以下に掲げておく（選択肢は省略）。

Q11　カタカナの文字はどこで覚えましたか。
Q12　カタカナの文字はどのように覚えましたか。
Q13　カタカナの文字はいつ覚えましたか。
Q14(1)　カタカナの文字を書くことについて、どのように感じていますか。
Q14(2)　それでは、ひらがなを書くことについて、どのように感じていますか。
Q15(1)　カタカナを読むことについて、どのように感じていますか。
Q15(2)　それでは、ひらがなを読むことについて、どのように感じていますか。
Q16(1)　日常生活の中で、カタカナ語がわからなくて困ったことはどれくらいありますか。
Q16(2)　困ったのはどんなときですか。（複数回答）
Q17(1)　カタカナ語を覚えたり使ったりすることは難しいですか。
Q17(2)　どんなところが難しいですか。（複数回答）
Q18　カタカナ語がわからいときは、どうしていますか。（複数回答）
Q19　どのようなクラスで、カタカナ語を勉強しましたか。（複数回答）
Q20　日本語の授業の中で、カタカナ語はどの程度教えてほしいですか。
Q21　日本語の授業の中で、カタカナ語の勉強についてどのような希望を持っていますか。
Q22　日本語の中でカタカナ語が使われていることについて、どう思いますか。
Q23(1)　Q22で「よい」と答えた人へ、なぜそう思いますか。（複数回答）
Q23(2)　Q22で「よくない」と答えた人へ、なぜそう思いますか。（複数回答）
Q23(3)　Q22で「どちらでもない」と答えた人へ、なぜそう思うのか、書いてください。
Q24　カタカナ語について感じていることがあれば、どんなことでもいいですから書いてください。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



## 2.3　回答者の内訳

日本語学習者の回答者属性は、調査票のフェースシートの項目順に述べると以下の通りである。

まず国籍では、中国がほぼ50%、韓国がちょうど20%、その他のアジア、台湾などが続く（表１）。これを母語別に見ても中国語、韓国・朝鮮語はほぼ同様の割合となり、英語が4.2%、それ以外の言語[2)]と続く（表２）。性別は女性の方が62.6%と多めである。年齢では、20歳代前半が58.2%、後半が25.1%となっており、20代が大半を占めている。所属先では、大学学部が最も多く全体の約３分の１、日本語学校など大学入学予備群が約３割、これに交換留学など短期滞在の学生が２割と続き、この３者で大半を占めている。在日年数と日本での日本語学習期間はほぼ共通しており、いずれも年数が短いほど割合が多い（表３）。日本留学試験（日本語）の受験者はほぼ半数、日本語能力試験（１級）の受験者はほぼ３分の１である。最後に、英語学習については、学習の有無でいえば全体の９割以上が既習で、期間については、６年以上10年未満が全体の約半数、10年以上が４分の１、続いて３年以上６年未満が約15%となっている。

なお、日本語学習年数、所属先をそれぞれの母語とクロスしてみたが、全体にバランスのよい分布となった。また英語学習年数と母語のクロスでは、中国語と韓国語・朝鮮語に

**表１　国籍別人数と割合（上段は人数、下段は%）**

| 全体 | 中国 | 韓国 | 台湾 | 他のアジア | 北米 | オセアニア | 中南米 | ヨーロッパ | アフリカ | 中近東 | それ以外 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 479人 | 238 | 96 | 19 | 61 | 13 | 4 | 10 | 29 | 6 | 1 | 1 | 1 |
| % | 49.7 | 20.0 | 4.0 | 12.7 | 2.7 | 0.8 | 2.1 | 6.1 | 1.3 | 0.2 | 0.2 | 0.2 |

**表２　母語別人数と割合（上段は人数、下段は%）**

| 全体 | 中国語 | 韓国語<br>朝鮮語 | 英語 | それ以外の<br>言語 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| 479人 | 238 | 111 | 20 | 109 | 1 |
| % | 49.7 | 23.2 | 4.2 | 22.8 | 0.2 |

**表３　日本での日本語学習期間（上段は人数、下段は%）**

| 全体 | １年未満 | １年以上<br>２年未満 | ２年以上<br>３年未満 | ３年以上<br>４年未満 | ４年以上<br>５年未満 | ５年以上 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 479人 | 181 | 158 | 67 | 34 | 15 | 11 | 13 |
| % | 37.8 | 33.0 | 14.0 | 7.1 | 3.1 | 2.3 | 2.7 |

2)「それ以外の言語」には、表１「国籍」から推測される様々な言語が含まれる。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



は６年以上10年未満が多いのに対し、それ以外の言語では10年以上が多い。これは前者が中学校からの学習、後者が小学校からの学習の多いことを意味している。

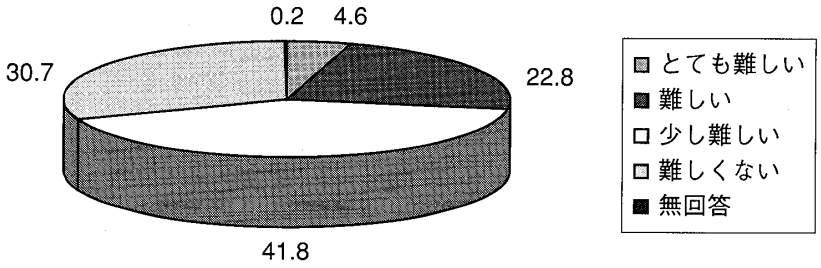
## ３．学習者のカタカナ語意識

調査項目ごとに、その全体的傾向や、母語別の比較を通した回答の特徴などを考察していく。なお、「英語」を母語とする回答者数は20名と非常に少ないので、母語比較の際のグループからははずし、必要なときに適宜参考として述べるにとどめる。したがって、母語比較のグループは、「中国語」、「韓国語・朝鮮語」、「それ以外の言語（英語を除く）」の３者である。

### 3.1　カタカナ文字の習得

「カタカナ文字」を書くことについてどう感じているか（Q14(1)）と、「カタカナ文字」を読むことについてどう感じているか（Q15(1)）に対する回答は両者酷似しているので、前者のみ掲げる。

図１　カタカナ文字を書くことについて（%）　N=479




「難しくない」の割合は30.7%とかなり低い。日本語学習年数とクロスすると、やはり年数の少ないほど「とても難しい」、「難しい」とする割合が増える。ちなみに、１年未満の学習者では、「とても難しい」（16.3%）、「難しい」（20.9%）とする割合は合計37.2%であり、カタカナ文字の定着が容易でないことを物語っている。

一方、比較のために調査をした「ひらがなを書くことについて、どのように感じていますか」（Q14(2)）は、カタカナ文字の場合と好対照を成す結果となっている。たとえば、「ひらがなと書くこと」について、１年未満の学習者についてみると、「とても難しい」「難しい」を合わせたものはわずか7.0%であり、その差は歴然としている。この結果は、結局文字教育の不均衡を物語っている。これに関しては、日本語教師に対する調査の中でも回答者によって言及されている。

なお、母語別にみると、「難しくない」とする割合が、韓国語・朝鮮語に若干多く出た（10ポイント弱）が、これは、ハングル文字との形の親近感があるからかもしれない。

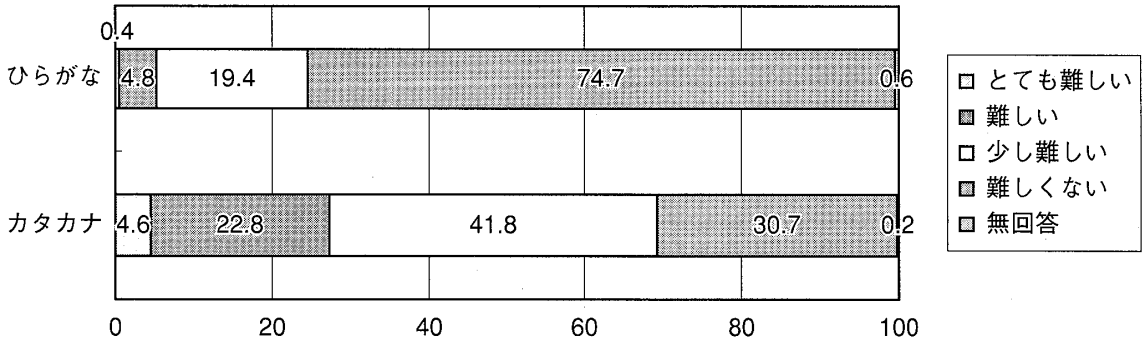


NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



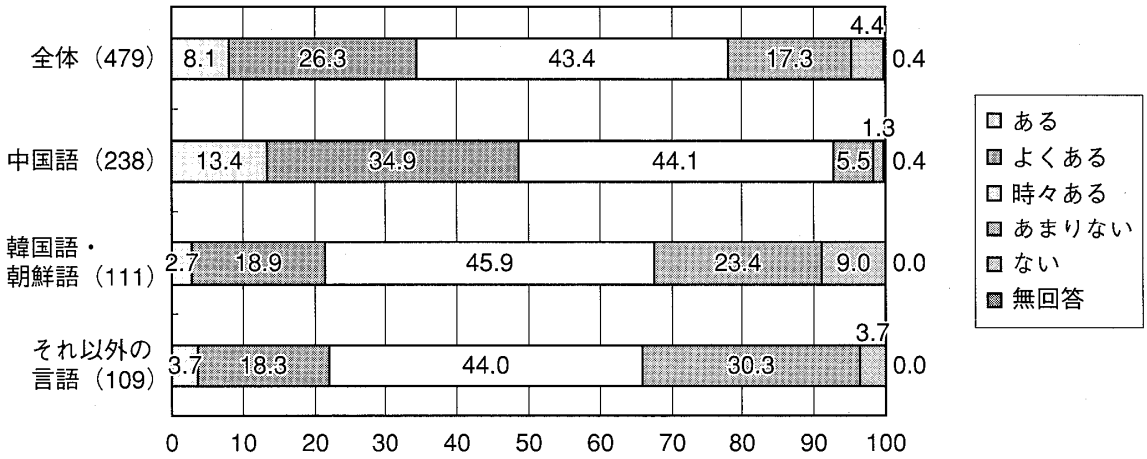
図２　「書くこと」のひらがな・カタカナ難易度比較（%）　N=479




## 3.2　カタカナ語と言語生活

「日常生活の中で、カタカナ語がわからなくて困ったことはどれくらいありますか。」(Q16(1)) に対し、全体の回答と母語別の回答が図３である。

図３　カタカナ語がわからなくて困ったこと（%）




まず全体的な傾向として、「ある」「よくある」「ときどきある」を合わせて77.8%と大部分を占めており、コミュニケーション上の大きな壁になっていることがうかがえる。ただし、この傾向は日本人ネイティブにとっても同様である。国立国語研究所（2004）によると、「外来語や略語の意味がわからずに困ったことがあるか」という質問に対し、実に、77.7%の日本人が「ある」と答えている。10代、20代の若年層に限るとこの割合は少し減って60%台になるのだが、それにしても、カタカナ語はネイティブにとってもやっかいなのである。

一方、母語別にみると、中国語話者に困難度が高く、「よくある」「ときどきある」合わせるとほぼ90%となるほどの高率である。それに対し、韓国語・朝鮮語話者とそれ以外の言語話者は70%弱に減り、かつ両者非常によく似た回答となっている。この要因としては、語彙（原語が欧米の言語）と文字（表音文字）の両面において、カタカナ語は中国語と相当の距離があり、それだけなじみがないからだと推測することができる。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



まず、カタカナ語との語彙的近さを日本語、韓国語・朝鮮語、中国語の類似度を比較してみる。例えば、佐々木瑞枝（2001）に挙げられている3カ国語対応表の最初から100語について語彙を比較してみた。その結果、カタカナ語と同じ語源を持つ「外来語」が対応している割合は、韓国語・朝鮮語が82語（82.0%）、中国語が0語（0.0%）であった。つまり、韓国語・朝鮮語には、発音は若干異なっているものの、すでに8割以上のカタカナ語彙が日本語と共有されており、これが両者の違いの大きな要因だと考えられるのである。

韓国語・朝鮮語話者とその他の言語話者との類似性も、同様の語彙の類似度で説明できる。後者の母語は、表1の出身国から推測されるように、そもそも英語との同系関係があって類似性の高い言語であったり、そうでない場合でも、欧米諸国が植民地や宗主国であったりして少なからず英語（ないし西洋語）からの影響を受け、借用という形で母語の語彙となっているケースが多い。したがって、日本語のカタカナ語に対しては、似た回答になるのである。一方、中国語話者は英語語源の語彙からは最も遠いという理由で、図3に見られるような明瞭な差異が出たものと思われる。

### 3.3　カタカナ語の習得・運用

「カタカナ語を覚えたり使ったりすることは難しいですか。」（Q17(1)）という質問に対しては、前節「カタカナ語がわからなくて困ったこと」と酷似した回答となった。両者は関連しており、習得が難しいから日常生活で困難を覚えるのである。そこで、Q17(2) で尋ねた、「どんなところが難しいですか」に対する回答を母語別に示した表4を検討しながら、それぞれの母語話者の特徴を明らかにしたい。

まず、中国語話者に関しては、その過半数が挙げた項目が4つあり、いろいろな点で難しいと感じていることがわかる。「意味推測不能」が最も多いのは、母語に対応する語が極めて少ないことから来る。また、そこで辞書を引いてみても載っていないことも多く、「辞書不掲載」を選んだのも多い。また、英語を知っている場合でも、「発音の違い」には多く困惑しているし、それを表記するとなるとこれも難しい。特に、促音、長音などは聞いただけではその知覚が難しく、結局正しい表記を見て、視覚的に覚えてしまわないといけないものである（この点については、日本語ネイティブにとっても、特に習得初期のころは当てはまる）。また、半数には届いていないが、他の母語話者と違いが大きかったものとして「既存の語」がある。これは、カタカナ語と同語源の語が少ないことから来るもので、「意味推測不能」を一歩進めて、なぜわざわざ新語を使うのか、という戸惑いないし不快感とも受け取れる回答となっている。

一方、韓国語・朝鮮語話者とそれ以外の言語話者に関しては、いずれも「発音の違い」に回答が集中した。これは、日本語の母音の少なさのために発音が単純化され音声の変容が大きいことがある。また音節構造について、日本語は開音節言語であるため原語音との



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



音声的ズレが大きくなるという要因も大きい。例えば、up, appealは外来語ではアップ[appu]、アピール［api:ru］となるのに対し、韓国語・朝鮮語の発音（ハングル表記）では閉音節のままであり、原語に近い。それ以外の言語でも閉音節が一般的で原語に近い。

韓国語・朝鮮語話者の回答の特徴として、「意味の違い」が極端に少ないことがある。これはおそらく日本語からの借用により、類似した意味を持つ語が存在するからであろう。逆に、その以外の言語話者にとっては、「意味の違い」が他に抜きん出て高い。英語と類縁関係にある言語や、直接英語を借用した言語の話者にとっては、原語の意味を知っているがゆえに、それとカタカナ語の意味のギャップが気になるところであろう。ちなみに、この点に関して参考までに英語を母語とする話者（12人）の回答をみると、「発音の違い」と「意味の違い」を挙げたのはそれぞれ12人と８人であり、それに集中する傾向があった。

**表４　カタカナ語の難しい点（母語別、%）**

| | 発音の違い | 意味の違い | 表記の困難さ | 既存の語 | 破格カタカナ表記 | 意味推測不能 | 辞書不掲載 | その他 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 69.1 | 29.7 | 49.3 | 40.2 | 29.4 | 55.7 | 50.7 | 1.2 | 0.7 |
| 中国語 | 60.5 | 28.7 | 52.5 | 45.7 | 34.1 | 64.1 | 55.6 | 0.4 | 1.3 |
| 韓国語<br>朝鮮語 | 71.6 | 16.8 | 46.3 | 31.6 | 25.3 | 44.2 | 47.4 | 2.1 | 0.0 |
| それ以外の言語 | 84.1 | 40.9 | 46.6 | 36.4 | 25.0 | 48.9 | 45.5 | 2.3 | 0.0 |

なお、表頭で用いた表現は、以下の選択肢の「略称」である。
「発音の違い」…カタカナ語は元の言葉（英語など）と発音がちがうところ
「意味の違い」…カタカナ語は元の言葉（英語など）と意味がちがうところ
「表記の困難さ」…カタカナ語を書こうと思っても、正しく書けないところ
「既存の語」…もともとの日本語の中に同じような意味の言葉があるのに、わざわざ外国から来た言葉を使うところ
「破格カタカナ表記」…もともとひらがなや漢字で書く言葉なのに、カタカナで書くことがあるところ（たとえば「ケータイ」）
「意味推測不能」…知らないカタカナ語は聞いたり見たりしても意味がまったく想像できないところ
「辞書不掲載」…辞書に載っていないカタカナ語が多くて、調べられないところ

## 3.4　カタカナ語習得レベルの希望

「日本語の授業の中で、カタカナ語はどの程度教えてほしいですか。」（Q20）に対する

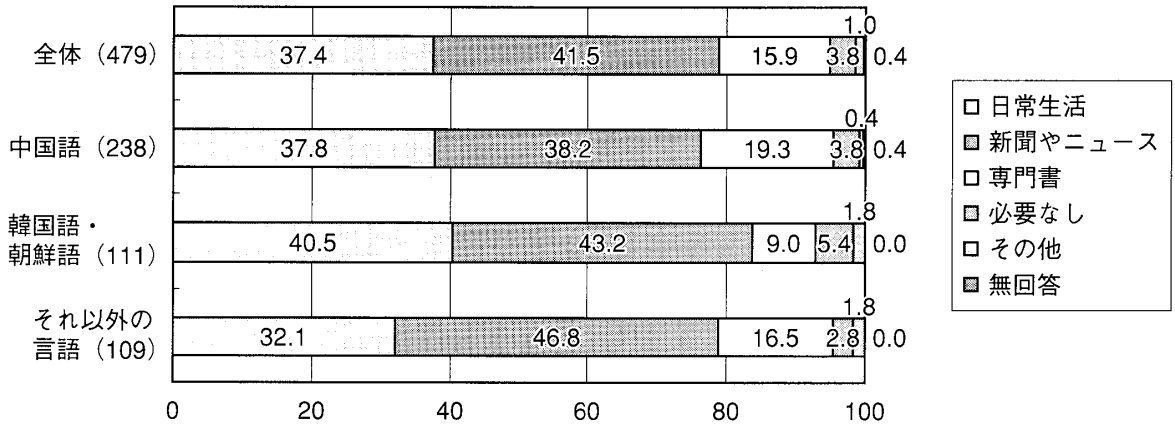


NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



図4　カタカナ語をどのレベルまで教えてほしいか（%）



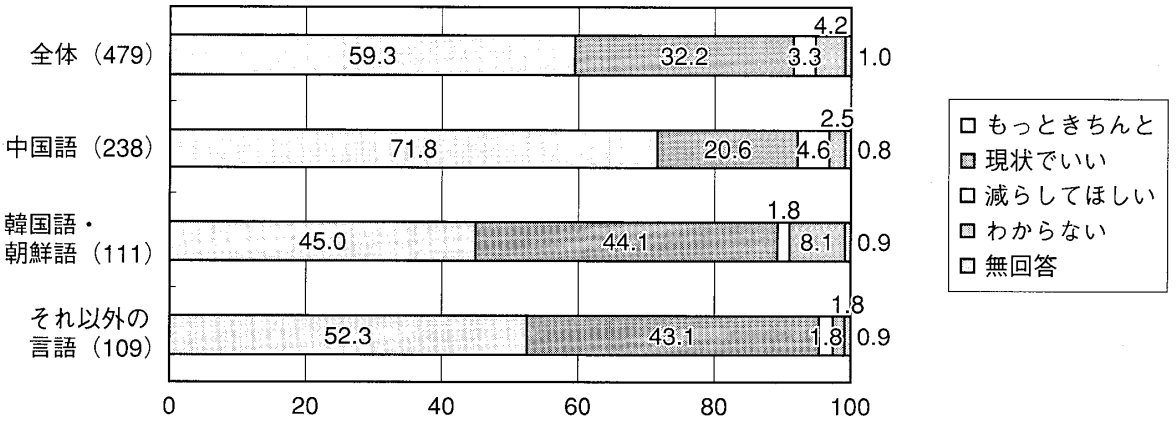

回答が図4である。

全体として、「日常生活で困らない」「新聞やニュースが読める」が多く、また回答者の中には学部学生や大学院生も多く含まれているので、「専門書が読める」も無視できない割合である。これについて、所属先とのクロスを取ってみた。さすがに大学院生は「専門書」で他よりも多く、また短期間滞在する交換留学生には、「生活」「新聞・ニュース」が多い。意外にも、大学進学以前の日本語学校生などに「専門書」が多かったが、これは将来のことを見越しての反応であろう。

### 3.5　カタカナ語学習への要望

「日本語の授業の中で、カタカナ語の勉強についてどのような希望を持っていますか。」（Q21）に対する母語別の回答が図5である。

図5　カタカナ語教育への希望（%）




全体に過半数が「もっときちんと教えてほしい」と答えている。母語別では、とりわけ中国語話者の要望が強い。韓国語・朝鮮語話者とそれ以外の言語話者では、「もっときち



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

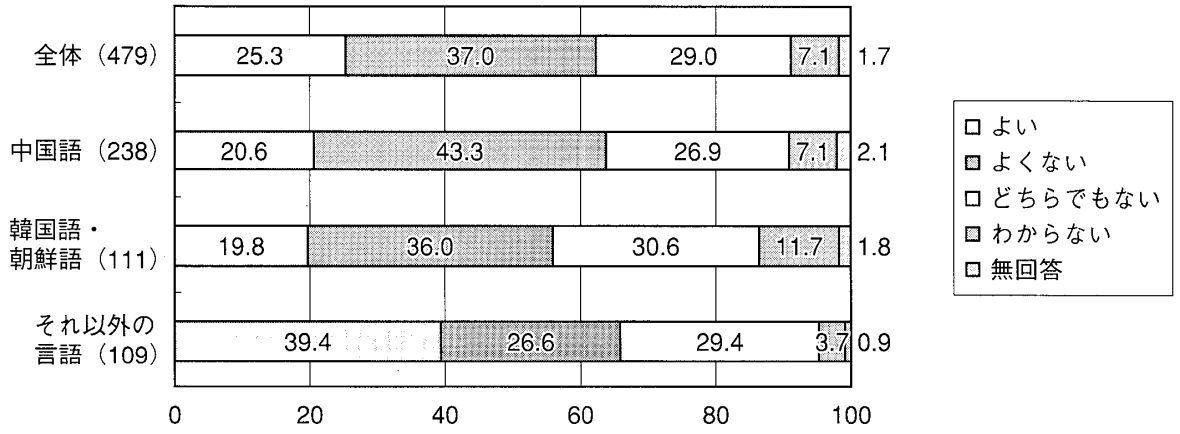


んと教えてほしい」と「今のままでいい」が拮抗している。これは上で見たカタカナ文字や語の習得、ならびにその運用の問題点と直結した結果であり、とくにカタカナ語に困難を抱えている中国語話者からの切実な叫びと受け取るべきであろう。

### 3.6　日本語の中のカタカナ語に対する評価

「日本語の中でカタカナ語が使われているのをどう思いますか。」(Q22) に対する回答結果が図6である。そもそも日本語学習者は日本語の中のカタカナ語をどう思っているのか、つまり彼らのカタカナ語に対する姿勢、あるいはカタカナ語観を知るために質問した項目である。

図6　学習者のカタカナ語観（%）




これに対する回答は、中国語話者と韓国語・朝鮮語話者が類似し、それ以外の母語話者が遠いという、これまでの回答傾向とは異なったものになった。つまり、日本語の中のカタカナ語の存在について、前者には「よくない」とする割合が最も高いのに対し、後者には「よい」とする割合が最も高い。前者については、同じく東アジアに位置し、また共通の文化を保持してきたものから見た反応かも知れない。

ここで、「どのような点でそう思うか」と尋ねた回答を検討したい。図7はQ22で「よい」と答えた者に「それはなぜですか」と聞いた結果、図8は同じくQ22で「よくない」と答えた者に「それはなぜですか」と聞いた結果である。

この両者の回答傾向を見ると、奇妙なことに図6の異同とは異なり、むしろ、これまでの類似性と同様に、中国語に対し、韓国語・朝鮮語とそれ以外の言語、という構図が浮かび上がってくる。ただ、図7（「よい理由」）の「わかりやすさ」で韓国語・朝鮮語が極めて低く出た理由はよくわからない。漢字文化の残存で中国語的反応が出ているのかもしれない。中国語は「原語との連想」「英語学習」「日本語の豊かさ」などに回答が集まっている。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



図７　「よい」と思う理由（複数回答、%）

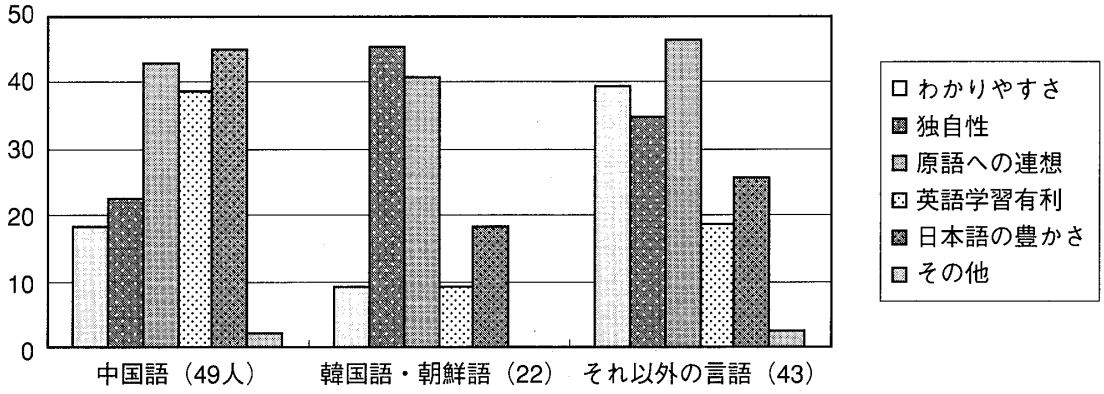
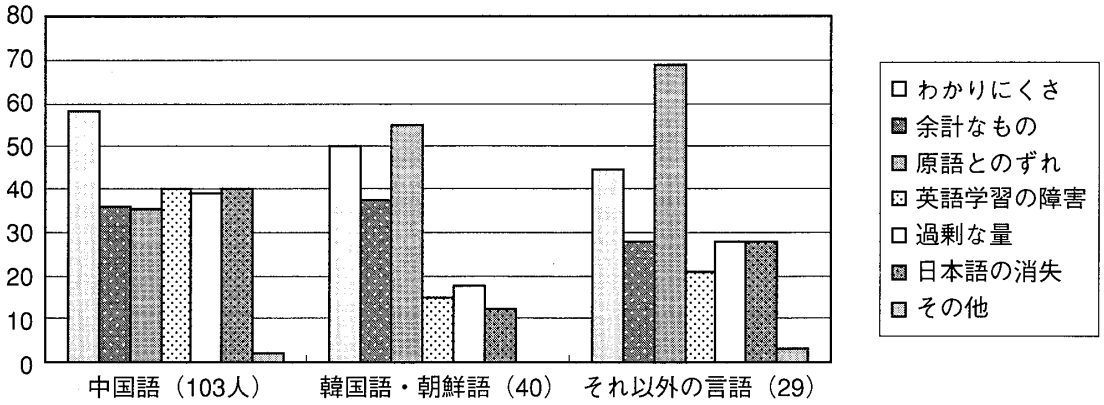



図８　「よくない」と思う理由（複数回答、%）




なお、図７、図８の凡例で用いた表現は、以下の選択肢の「略称」である。
（図７）
「わかりやすさ」…わかりやすいから
「独自性」…カタカナ語でしか表せないものがあるから
「原語への連想」…英語などの元の言葉が想像できて意味がわかるから
「英語学習有利」…英語の勉強に役立つから
「日本語の豊かさ」…日本語が豊かになるから
（図８）
「わかりにくさ」…わかりにくいから
「余計なもの」…カタカナ語を使わなくても表わせるから
「原語とのズレ」…英語などの元の言葉と全然違うから
「英語学習の障害」…英語の勉強のじゃまになるから
「過剰な量」…カタカナ語の量が多すぎるから
「日本語の消失」…日本語が失われるから

図８（「よくない」理由）では、前述の区分けが明瞭である。「よくない」理由として韓国語・朝鮮語が「原語とのズレ」「わかりにくさ」「カタカナ不要」に集中するのに対し、それ以外の言語が「原語とのズレ」「わかりにくさ」のふたつに集中している。一方、中国は「わかりにくさ」を筆頭に、「カタカナ語不要」「原語とのズレ」「英語学習の障害」



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



「過剰な量」「日本語の消失」などあらゆる選択肢に30％後半から40％弱の回答があるという分布である。

## 4．学習者の回答から見えてくるもの

以上の学習者からの回答を整理すると、カタカナ教育においては、次のようなことが教訓として見えてくる。

（1）母語による違い

日本語との語彙面での相違の程度や文字の違いなどが原因となって、カタカナ語に対する抵抗感には母語による違いがある。中国語は、世界の言語の中でもカタカナ語から最も遠い存在のひとつと考えられ、ここにカタカナ語習得上の大きな障害があると思われる。ただ、中国国内において英語学習が盛んになるにつれて、今後はこのことは少しずつ解消されていく可能性はある。一方、韓国語・朝鮮語は日本語や英語との接触、あるいは表音文字としてのハングルがあるおかげで、カタカナ語そのものにはそれほど抵抗感はなく、東アジアの言語ではありながら、「それ以外の言語」と類似した反応であることが明らかになった。

（2）カタカナ語学習要望の違い

（1）と連動して、とくに中国語話者に「カタカナ語をもっときちんと学習したい」という要望が高く、これにはきちんと答えていかなければならない。教育の現場ではカタカナ語を毛嫌いして学習意欲をなくしている者も見かけるが、全体としては高い学習意欲を感じる結果である。まずは日本語学習の初めの段階できちんとしたカタカナ文字習得を目指し、彼らのカタカナ語に対する苦手意識のベースとなっている部分を少しでも取り除く必要性を感じる（Q14(1)、Q15(1) 参照）。

（3）英語学習歴とカタカナ語学習要望

最もカタカナ語を苦手とする母語グループの中国語話者に限って、英語学習歴を尋ねた質問（Q10）とカタカナ文字意識やカタカナ語意識をクロスしてみたところ、次のような関連がわかった。ここでは、英語学習歴をA群（学習歴3年～5年）、B群（6年～9年）、C群（10年以上）の3つに分けてみた。なお、他の学習歴は該当する人数が少なく信頼性に問題ありとして比較からはずした。表5は、英語学習歴と最も相関の高いと思われる「カタカナ語学習要望」（Q21）とのクロスである。学習歴が短いほど必要性を感じていると読める結果である。ただ、大勢としては「もっときちんと」学習したいと願っている。



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



**表5　英語学習歴とカタカナ語学習要望（%）**

| 学習歴＼要望 | もっときちんと教えてほしい | 今のままでよい | 今より減らしてほしい | わからないその他 |
|---|---|---|---|---|
| A群（35人） | 85.7 | 11.4 | 2.9 | 0.0 |
| B群（110人） | 70.9 | 16.4 | 8.2 | 4.6 |
| C群（35人） | 61.8 | 32.7 | 1.8 | 3.6 |

これと近い関連があるのが、「カタカナ語に困っていること」（Q16(1)）である。この他、わずかに関連があるのが、「カタカナ文字を書く」（Q14(1)）、「カタカナ文字を読む」（Q15(1)）、「覚えたり使ったりすることの難度」（Q17）などである。一方、ほとんど関連のなかったのが、「習得レベルの希望」（Q21）、「カタカナ語観」（Q22）であった。

全般的な印象としては、英語学習歴とカタカナ意識との関連は予想されたほどにはない。英語学習歴2年未満のグループが比較対象になれば差異は出たかもしれないが、中国では現在小学校からの英語教育が始まっており、現実問題として、比較の意味がなくなってきている。

（4）カタカナ語辞書

これまでは論じてこなかったが、「カタカナ語がわからないときは、どうしていますか（複数回答）」（Q18）という質問に対しては、「自分で辞書を引く」（79.1%）が圧倒的に多く、次いで「友人・知人に聞く」（43.2%）、「先生に聞く」（29.7%）が続く。つまり、解決法としては、圧倒的に辞書を頼みにしている様子がわかる。したがって、カタカナ語辞書の充実を図るとともに、教師の側にもカタカナ語辞書を「見る目」が必要になってくる。

なぜ、カタカナ語を教えることが重要か、そしてそのためのカタカナ文字の早期の定着が大切か。今回の学習者への調査を通して明らかになったことは、学習者の学習要望を満たすために、教師側がそのモチベーションを高める必要があるということである。それには、まずは現在の日本語におけるカタカナ語の位置づけや使用実態の理解が必要である。国立国語研究所の70雑誌調査（国立国語研究所　2005）の結果では、外来語の使用率が30%以上に上っており、40年前の同種の調査（国立国語研究所　1962–64）のほぼ3倍となっていることがわかっている（国立国語研究所　2006）。この傾向は今後も衰えることはないと思われる。また、日本語学習者を取り巻く言語環境という観点からも、カタカナ語使用の実態をしっかり押さえる必要がある。これには金城（1998a）や金城（1998b）、中山（2001）などの実態調査が不可欠である。

Q21で見えた「もっときちんと教えてほしい」という要望にどう向き合うか。いろいろな指導上の工夫はなされても、結局は教師側の意識が根本的に変わらなければ部分的な試



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



みに終わってしまうであろう。そして気付いたときには時代遅れの文字教育、語彙教育を行なっていたとならないよう、意識を高め対策を講じるべきである。

本論考は、平成17年度～18年科学研究費補助金基盤研究（C）「カタカナ教育の基礎的研究―日本語教育における分野の確立を目指して―」（研究代表者：中山恵利子）による研究成果の一部である。

**引用・参考文献**

岡本佐智子（1997）「外来語の習得ストラテジー―中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語の中間言語―」『留学生日本語教育センター論集』23　東京外国語大学

荻原廣（2001）「日本語教育における外来語指導の必要性」『日本言語文化研究』第３号　龍谷大学

木本壽美恵（2003）「タイ人日本語学習者のカタカナ外来語表記の傾向について」『日本語教育論集』第12号　姫路独協大学

金城ふみ子（1998a）「「大学広告」におけるカタカナ表記語及びアルファベット表記語の使用状況―調査報告―」『早稲田大学日本語研究教育センター　紀要』10　早稲田大学日本語研究教育センター

――――（1998b）「TIU 新入生配布資料におけるカタカナ表記語使用の実態分析」『東京国際大学論叢』第19号　東京国際大学

国立国語研究所（1962-64）『現代雑誌九十種の用語用字』秀英出版

――――（1990）『外来語の形成とその教育』日本語教育指導参考書16　国立国語研究所

――――（2004）『外来語に関する意識調査（全国調査）』国立国語研究所

――――（2005）『現代雑誌の語彙調査―1994年発行70誌』秀英出版

――――（2006）『外来語の言い換え提案』ぎょうせい

佐々木瑞枝（監修）（2001）『よく使うカタカナ語』アルク

中山恵利子（2001）「日本語教科書の外来語と新聞の外来語」『日本語教育』109　日本語教育学会

――――編（2006）『日本語教育現場におけるカタカナ教育の実態調査』阪南大学

モトワニ，プレム（1991a）『日常外来語用法辞典』丸善株式会社

――――（1991b）「日本語教育のネック―外来語」『日本語教育』74　日本語教学会

李政祐（1999）「韓国語話者の日本語における外来語表記に見られる韓国語外来語の影響」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会

李美禮（2002）「日本語における外来語の誤用分析」『日本語文学』第18輯　日本語文学会

Uchida, Emi and Nakamura, Taichi (2000) The Advantage of Katakana Words: English Learners' Ability to Identify English Loan-word Cognates in Japanese, *BATJ Journal* No. 1, The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



# 日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育

陣　内　正　敬

日本語学習者がカタカナ語（外来語）を学習する際、どのような点にその困難を感じているかを探る目的で、全国的なアンケート調査を行った。調査は2006年７月から10月にかけて、全国の主な日本語教育機関（日本語学校、研修施設、大学、大学院など）に配布し、総計479人の外国人日本語学習者から回答を得た。彼らの母語別の内訳は、中国語49.7％、韓国・朝鮮語20.0％、英語4.2％、その他の言語26.1％であった。この調査から以下のことが明らかになった。

１）カタカナ語の習得に困難さを感じるのは、学習者の母語によって大いに異なる。中国語を母語とする学習者が最も困難さを感じ、韓国・朝鮮語とその他の言語がほぼ同程度でそれに次、英語母語話者は最も抵抗が少ないことがわかった。これは、学習者の母語における語彙が、カタカナ語の由来となっている英語をはじめとする西洋語と、どの程度共通しているかによると思われる。

２）カタカナ語学習要望は、学習者の英語学習期間の長短と関連が見られた。特に中国語母語話者に関しては、英語学習歴を３～５年、６～９年、10年以上と３つのグループに分けて比較すると、期間が短いほど熱烈な学習要望が出た。

これまで日本語教育においては、カタカナ語教育はまともに扱われてこなかった。ただ、近年のカタカナ語の急増ぶりと日本語語彙の語種割合の変化を考えれば、カタカナ語教育の充実は緊急の課題といえるだろう。



NII-Electronic Library Service